

[遺族] 吉田 陽向 氏（平成 14 年（当時 1 歳）、父を交通事故で失う）

[要旨]

○当時の状況

当時 28 歳だった父は、早朝、いつものように仕事に出かけ、1 時間も経たないうちに事故に遭いました。「今日頑張ったら明日はやっとお休みだから、頑張ってくるね」という言葉が、母が最後に聞いた言葉だったそうです。

事故は、父が家具配送の仕事でトラックに乗っている際に起きました。原因は同乗していたトラックの運転手の居眠りでした。助手席に乗っていた父も眠っていたのかもしれませんが、「御主人が大変な事故に遭われました、すぐに来てください」と連絡を受けた母が病院に着くと、父はすでに息を引き取っていました。即死だったそうです。

○当時後の家族の状況

母は父のことを「28 歳で亡くなった悲劇の人」にさせないために、自分にできることは全てやろうと当時は必死だったと語っていました。中でも、事故で気力を失っている中で保険会社に任せきりにすると損をする方向に進んでしまうかもしれない保険に関する問題や、加害者の弁護を得意とする意味合いが強いことが多い交通事故専門の弁護士が多い中で、被害者に寄り添ってくれる弁護士を探すことには苦労したと聞きました。裁判では、トラックを運転した加害者も深刻な障害を負い脳死状態になってしまったため、刑事責任を問うことができず不起訴扱いになりました。また、母は、父方の遺族との折衝の中で理不尽な言葉をかけられ、自分も被害者であるはずなのに責められる言葉を受け止めるしかなく、そのことが今でも心の傷になっていると語っていました。

大切な人を失う痛みは、誰にとっても本当に耐え難いものです。交通事故の被害者は本人だけではなく、その伴侶も家族も被害者です。だからこそ、相手を責めるのではなく、寄り添い支え合うことは、つらく苦しい状況の中でも決して忘れてはならない大切なことだと考えます。

事故の対応が落ち着いた後も、精神的に不安定になっていた母の姿をおぼろげながら覚えています。心療内科の先生に言われるがままに治療を受けたところ、薬と副作用が増え続け、一時期は自分の体温もわからず、人前に出ると手足が震え、本当に苦しい思いをしたと聞きました。まだ幼かった私には、母の苦しみを全て理解することはできませんでした。それに、母を助けることもできませんでした。当時を思い返すと、ただ寄り添い、普段どおりに接することが一番大切なことだったのかもしれない。

○事故後の自身の状況

事故当時、私はまだ 1 歳だったため、物心ついたときには父はすでに交通事故で亡くなっており、私自身は母と二人での生活が当たり前だと感じていたため、父がいないことについて

て特に違和感や不満を持たずに受け入れていました。母は、いい意味で私に気安く接してくれ、やりたいことがあれば応援し見守ってくれるような人だったので、寂しいと感じることや自身の境遇に引け目を感じることもありませんでした。しかし、周囲の人に交通事故のことや母子家庭であることを打ち明けると、どうしても不必要に気を遣われ「かわいそうな子」として扱われることが多いと感じます。悪気がないことはもちろんわかっていたので、そういった言葉を受けても気にしないようにしていました。しかし、色メガネで見られることにはやはり抵抗があり、親しい友人に対しても、自身の境遇を積極的に打ち明けることは避けていました。話せばきっと理解してくれることはわかっている、自身の気持ちを誰かに共有できることはないのだろうという諦めがありました。

〇気持ちを共有できる仲間がいること

そんな中、東京の大学への進学を機に、交通遺児育英会の寮「心塾」に移り住むことになりました。それまで同じような境遇の人と話したことがなかった自分にとって、交通遺児としてそれぞれの境遇に対する理解があり、そして自身の経験や気持ちを打ち明け共有することができる仲間がいるという環境は、思っていた以上に安心できるものでした。私だけでなく、他の寮生にとっても心の拠り所になっていると感じます。

交通遺児が自身の悩みに関して相談できる環境やただ話を聞いてもらえる環境が、身近にあるだけで安心につながります。こども自身がそのような場にたどり着けるよう、経済面の支援だけでなく、目につきやすい場での情報の掲示や発信がされるなど必要な支援を受けるための情報面での支援が、継続的かつ活発に行われればよいと考えます。

〇伝えたいこと

当たり前存在だった家族が突然亡くなり生活が大きく変わってしまうことも、私のように幼くして家族を亡くし家族の思い出がないことや一般的な家庭との違いに悩むことも、本当につらいことだと思います。そのような経験を乗り越えることは、並大抵のことではないと考えます。それでも自分を責めないでください。抱え込まないでください。どんなにつらく苦しいときでも、支えてくれる人や自分の痛みを理解してくれる人は必ずいます。自分自身を責めてしまうようなときや悩みに押しつぶされそうなときに、このことを思い出していただければ嬉しいです。